共生社会を考える ①

相模原殺傷事件から1年

地域で暮らす幸せ

障害者も同じ人間、一人一人意識を

NPO法人障害者自立応援センターYAH!DO(やっど)みやざき
理事長
岩切　文代さん(54)

いわきり・ふみよ　1963年、福岡県生まれ。97年、友人や親戚のいる宮崎市へ移住。自立した生活を望む障害者の相談などに対応する。

神奈川県相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」で起こった殺傷事件から、26日で1年。元施設職員の植松聖(さとし)被告により入所者19人の尊い命が奪われ、植松被告の「障害者なんていなくなってしまえ」という、極めて独善的な言葉が世間に大きな衝撃を与えた。事件から1年を迎えた今、私たちはこの事件にどう向き合うべきか。また、共生社会の実現には何が必要なのか。県内の障害者やその家族、支援者らに話を聞いた。

×　×

手足の先から筋力が低下していく「遠位型ミオパチー」という難病で、22歳から車いす生活を送っている。今は首から下が動かせず、全介助を受けながら、家を借りて暮らしている。

同じように重度の障害がある人は、介助してくれる人を信頼して身を預けている。だからこそ、元職員が起こしたこの事件は、本当にショックで胸が締め付けられる思いだった。1年たった今も、被害に遭った人たちの恐怖はどれほどだっただろうかと思うと言葉にならない。

けれど時間がたつにつれ、報道される機会は徐々に少なくなっている。「そんな事件もあったかな」という世間の空気を感じる。もっと継続的に報道してほしい。

遺族の要望や神奈川県警の判断で、被害者全員が匿名で報道された。もし街中で起こった無差別殺人事件だったら、こうなるだろうか。名前や人柄が分からないままというのはむなしい。障害者だから匿名とした判断は間違いだ。

▽一面しか見ていない

被告は「家族が疲れ切っている」と供述しているが、一面しか見ていない。母は私に「あなたがいないと生きていけない」と言う。被害者の家族も愛情を注いできたはず。親子の間には、犯人の知らないもっと強い絆がある。「障害者は不幸をつくることしかできない」という自分の考えだけを正しいと思い込み、凶行に走った被告が許せない。

以前、障害者支援施設に入所していた。起床や食事などの時間が決まっていて、熱があれば週2回の風呂にも入れない。見えない「おり」を感じ、息をしているだけのような生活だった。

ここで一生を終えたくないと、「やっどみやざき」に自立を相談。理解のある大家さんに出会い、トイレや風呂を改築した家を借り、24時間介護を受けながら12年間暮らしている。食材を選んだり献立を決めたりと、自分で決められる生活は本当に幸せだ。

▽母に感謝

亡くなった妹にも障害があった。私と妹を一生懸命に世話をし、助けてくれる母に感謝している。その母が「障害があっても自立して、地域で生活するあなたを誇りに思う」とも言ってくれたことがある。そして、妹と父をみとった母が、私に「最期をみとってね」と言ってくれた。1人の大人として認めてもらえたようでうれしくて、母より長く生きようと思っている。

障害者を支えていく、と考えるとハードルが高いかもしれない。障害があってもなくても、同じ人間なんだという意識を持つことが大切。一人一人の考え方が変われば、きっとだれもが安心して住める社会になる。(取材・徳留亜弥、撮影・那良卓郎)

＝水曜日掲載＝

共生社会を考える ④

相模原殺傷事件から1年

差別解消には対話

宮崎公立大人文学部
教授
辻　利則さん（53）

つじ・としのり　1963（昭和38）年、えびの市生まれ。情報通信技術を用いた災害弱者支援が主な研究テーマで、県ボランティア協会の会長も務める。

障害者の意見取り入れた福祉機器多い

以前、全身の筋肉が徐々に萎縮する難病「筋ジストロフィー」の患者たちの病室を仕事で訪れたことがある。6人ほどの相部屋で、ほぼ全員が（症状が進んで）話すこともできずに寝たきりの状態だった。

「返事はできないだろうから…」と、あいさつもせずに入室したが、病室内で作業をしている途中でハッとした。外見上は「動けない」「話せない」というだけで、本当は皆、いろんなことを考えているのだと気付いたためだ。作業を終えた私は「失礼しました」と言って病室を出た。

相模原殺傷事件では、頭の中ではいろんなことを考えていて、逃げたくても動けないような人たちが、急に刺された。言えない、叫べない…。すごく苦しかっただろう。やりたいこともあっただろう。被告は入所生活を送る人たちが「生きている」ことが分からなかったのだろうか。

▽当事者の経験

犯行の背景に「優生思想」も指摘されたが、この社会に、そんなにも優れた人間がどれだけいるだろう。「障害者が何の役に立つのか」となどと言う人がいるかもしれないが、例えば障害のある人がいるからこそ生まれた福祉機器は多い。

私たちは年齢を重ねる中で、いつかは何らかの障害を抱える。多くの人は、高さが上下するベッドや電動車いすのお世話になるが、その時に初めて便利さに気付かされる。開発過程には、何が不便なのかをよく知っている障害者の意見が取り入れられている。

私も障害者や高齢者が、災害に遭遇した際の情報共有システムの開発などに関わっているが、当事者に教えられる場面ばかりだ。災害時に何が必要になるのか、何が不便かをイメージしようとしても容易ではない。さまざまな苦労、経験をした当事者にアイデアを教えてもらっている。

▽まずは聞く

障害者差別解消法も昨年4月に施行されたが「施設の改修にコストがかかる」とか「雇用が難しい」といった暗い面で考えられることが多いようだ。しかし「どうしたら働きやすくなるのか」とか「いかにしたら宿泊できるのか」といった課題について、事業者をはじめ障害のない人と障害のある人が一緒に考えられるようになると、新しい何かが生まれる契機にもなる。

職場の入り口に車いすのためのスロープを設けるとなれば確かにコストがかかる。しかし、1センチの段差を障害と思う人もれば、3センチや5センチの人もいる。話し合いで「少しの手助けがあればいい」ということになれば、入り口に呼び鈴を置くという方法も出てくる。

店舗をバリアフリーにするというのは、店全体を改装するという話ではない。車いすの人から「目の高さに商品を置いてほしい」と意見があれば、品物を下に移動するだけいい。便利になれば、車いすの高齢者も来店するだろう。手を掛けた分は必ず戻ってくる。まずは当事者に聞くことだ。

障害のある人とない人が対等に話し合えるのが共生社会の理想像だろう。ただし、それを実現するにはもう少し時間がいる。今の段階では、障害のない人たちが、積極的に障害者の意見を聞くことが大事だと考える。

（取材・杉田亨一）

＝水曜日掲載＝

共生社会を考える ⑦

相模原殺傷事件から1年

状況応じた支えを

その人自身を知り、理解し合いたい

就労継続支援A型事業所で働く

森　愛実さん(26)

もり・めぐみ　1991年、宮崎市生まれ。9歳で難病の全身性ジストニアを発症。入退院を繰り返しながら地域の小中学校に通う。鵬翔高、鹿児島県の鹿児島第一医療リハビリ専門学校卒。宮崎市。

9歳で難病になり、障害者となった。意思に反して体がねじれたり動かしにくくなる症状を抑えるため、対症療法を受けながら車いす生活を送っている。

小中高は地元の学校に通った。症状が悪化して、いすに座ることが難しいときは床にマットを敷いて授業を受けた。トイレや移動教室の際は友人がサポート。教室で授業を受けるのが難しいときは、保健室で先生が1対1で教えてくれたり、教室を1階に変えたりなど学校側の配慮もあった。おかげで毎日通うことができ、学校が大好きだった。

「歩き方が変」と陰口を言った人に、友人が「お前はめぐの何を知っちょっとか」と注意してくれたと後で知った時は、うれしくて泣いた。友人は「障害があるとか考えたことない」「めぐはめぐやから」と言う。今も変わらず対等に接してくれるのがうれしく、感謝の気持ちでいっぱい。

▽優生思想怖い

相模原殺傷事件の発生直後は、メディアで見た植松聖(さとし)被告の笑顔や「障害者なんていなくなってしまえ」などの発言に恐怖やショックなどいろいろな気持ちが入り交じった。1年が過ぎ、メディアでほとんど取り上げられなくなった。忘れる人も多いのではと非常に残念。重い課題だからこそ、目を背けてはいけない。

報道によると、植松被告は「生きる価値のない人を排除する」という考えだが、人をあやめることこそ理解できない。優生思想にも不安や怖さを感じる。

障害者になって、体への不安やできないことへの歯がゆさを感じることはあっても、悲観するまでにはならない。それは家族からの大きな愛や、学生時代の友人や社会で出会った人たちの支えがあるから。

「何も悪いことはしていないのだから、助けてもらったらありがとうと言いなさい」という母の言葉にも救われた。多くの助けは必要だが、自分ができることに目を向ければ自信がつき、希望も見えてくる。

障害者になってからの私しか知らない人も、勇気を出して話し掛ければ、受け入れてくれた。「障害者は不幸をつくることしかできない」という植松被告の考え方はむなしく、悲しい。

▽心のバリアフリーも

「私も人の役に立ちたい」と言語聴覚士の資格を取った。就職を目指したが、体力面の不安や、通勤時にヘルパーが利用できなかったため、宮崎市の就労継続支援A型事業所で働いている。今でも、夢はあきらめていない。障害者それぞれの状況に合った支援が受けられるようになってほしい。

昔に比べると、トイレなどのバリアフリー化が進み、公共施設が利用しやすくなった。しかし以前バスに乗ろうとした際に、車いす対応なのに「事前に電話して」と、面倒くさそうにリフトを出されたことがあった。ハード面だけでなく心のバリアフリーも必要だ。

障害の有無に関係なく、その人自身を知り、理解し合いたいと思うことが、共生社会につながる。地域の学校に通って感じた。自分を大切にしてくれる人を大切にしたい。そういう気持ちが広がることで、人に優しくでき思いやりの心も育つ世の中になってほしい。

（文・徳留亜弥、撮影・押川真基）

＝水曜日掲載＝

共生社会を考える ⑧

相模原殺傷事件から1年

偏見や差別 直視を

正確な知識、行動をポジティブに

九州保健福祉大保健科学部
言語聴覚療法学科准教授
松山 光生さん(49)

まつやま・みつお 1968(昭和43)年、岐阜県生まれ。脳性まひがある。筑波大大学院修了。博士(心身障害学)取得。2004年から九州保健福祉大勤務。専門は臨床発達心理学。延岡市。

事件直後は、特異性のみに着目していた。極めてまれで、身近な場所では起きず繰り返されることもない事件だと捉えようとした。優生思想を大きく取り上げ、ナチス時代を重ねるマスコミに怒りさえ覚えた。当時、会員制交流サイト(SNS)にこう書き込んだ。

【障害者施設「津久井やまゆり園」の殺傷事件、悲惨すぎる。障害者を蔑視された憤りも底知れぬほどある。報道で知る限り、容疑者の犯行動機はゆがんでおり、薄っぺらだと思う。思想なんて高尚なものでは決してない。ここに優生思想やヒトラーの映像まで重ねてしまうと、社会の何かが覚醒しそうで怖い】

今の気持ちは少し違う。障害者に対する偏見や差別の延長線上に、事件が起きたことを直視する必要があると考えている。その偏見や差別は、私も含めて多くの人が持っていると思う。

▽背景の推測難しい

植松聖(さとし)被告の生い立ちや環境が、どう作用して事件に至ったかなど背景を推測することは難しい。ただ特別支援教育の観点で考えると、小中学校の通常学級ではかつて、発達障害や精神疾患のある児童生徒は放置されることが多かった。被告の児童期や青年期に特別支援教育が適切に行われていたら、差別やゆがんだ行動を防げたかもしれない。

障害者の介助や介護現場は、身体的、精神的に過酷だが、社会的な使命感や崇高な意志を持つ人が多い。被告は仕事から逃げ出す理由を合理化するために、ゆがんだ行動に走ったのだろうか。だが結果として、取った行動は最悪だった。

真の共生社会を実現させるためには物理、制度、経済などさまざまな問題を解決する必要がある。例えば一部の人のために利便性を図ると、あらゆる人にも有益になる。誰でも使いやすいように配慮する「ユニバーサルデザイン」の考え方が、共生社会の鍵を握る。

▽命の存在認めよう

優生思想について答えることは大変難しい。国や社会が命の選別を助長することを認めてはいけない。一方で出生前診断の結果、中絶を選んだ夫婦を簡単に非難できるだろうか。生まれた命は存在する意味が必ずある。社会が多様な価値観を持ち、命の存在を認めることが大切だ。

ある父親は「障害のある娘が言葉を話してくれなくても、笑顔を見ると明日も頑張ろうと思える」と話してくれた。私の存在意義を認めてもらったようでうれしかった。障害があっても、周囲を幸福にできることを体験し知ってほしい。

学生時代、重度の障害者施設を初めて訪れた時や、施設で自分より障害の重い人に出会った時にショックを受けた。同じ障害者なのにと自己嫌悪に陥った。障害者に対して、同じような感情を抱く人は少なくないだろう。しかし、感情をコントロールするのが人間ではないだろうか。正確な知識を持てば、感情は変えられなくても善悪を判断し、行動をポジティブに変えていくことは可能だろう。

事件を繰り返さないためには、障害のある人に関わる全てのことを内容に含んだ人権思想、特にノーマライゼーションの思想を基軸に据えた「障害理解教育」が必要だ。

(取材・徳留亜弥)

=水曜日掲載=

共生社会を考える ⑨

相模原殺傷事件から１年

命に優劣は悲しい

幼いころから障害者とふれあいを

生活支援員
日髙　健太さん(25)

ひだか・けんた　1992年、宮崎市生まれ。宮崎農業高、宮崎公立大卒。同市の社会福祉法人まほろば福祉会が運営する、国富町の障害福祉サービス事業所「天領の杜」職員。同市。

障害者施設で働き始めて4年目。トイレや入浴、食事介助をしている。中には言葉が話せなかったり意思を表現できなかったりする人もいるが、どの利用者に対しても寄り添うような姿勢を心掛けている。

意思の疎通が難しい利用者が別の施設に転居した後、久しぶりに再会したことがあった。「また来ますね」と呼び掛けたら手を上げてくれた。接し続ければ喜怒哀楽が分かるし、言葉はなくても心を通い合わせることができる。

だからこそ、相模原殺傷事件は衝撃的だった。障害者施設職員の経験がありながら、「障害者なんていなくなってしまえ」と供述した植松聖(さとし)被告は理解に苦しむ。事件後、私の事業所でも防犯カメラを設置した。それでも1年が過ぎた今、事件のことは少し忘れかけていたかもしれない。

▽同じ人間と実感

大学2年生の時に、脳性まひの男性に出会った。障害者と接したのはこれが初めて。3年生で、宮崎市のNPO法人県ボランティア協会が主催する、障害のある人とない人が一緒に過ごす「ふれあいの旅」に参加した。

ペアを組んだ男性は脳性まひで、歩けず電動車いすに乗っていた。ヘルパーから立位の取り方などを教わったが、体がふらついた。言葉も聞き取れず、本当にできるのかと怖くなった。

1対1で介助をしながら、1泊2日で長崎県を訪れた。トイレや入浴の介助も初めて。プライベートな領域に触れることに戸惑い、けがをさせまいと必死だった。宿泊先で2人きりになり、話し掛けてくれるが分からない。「あ・か・さ…」と伝えたい言葉の行が来たら反応してもらうなどして、理解しようとした。

ところが、最終日には「トイレ」「飲み物」など男性の言葉が分かるようになり本当に驚いた。食事やカラオケを一緒に楽しんでいると「同じ一人の人間なんだ」と実感。最初に感じた不安は次第になくなり、充実感が残った。

▽大変さ超えるやりがい

「ふれあいの旅」には4年生の時も参加。障害者に対する壁がなくなり、福祉の道を志すきっかけにもなった。昨年もボランティアで加わり障害者の喜ぶ顔を見て、原点に立ち返った。

仕事では「ありがとう」と言われることが励みになる。半身まひの人がトランプのババ抜きができなかった時、カードを置く台を作ったら参加できたことがあった。支援方法を少し変えるだけで、自立を促すことができると気付いた。

障害者と関わる仕事は、大変なことやストレスを感じることもあるが、それを超えるやりがいがある。植松被告は「重複障害者が生きていくのは不幸だ」とも供述しているが、命に優劣をつけることは悲しい。生きる意味はその人自身が決めるのであって、他人ではない。

大学時代、障害者と交流した幼児の心理的変化を研究した。書などを一緒に体験するうちに、不安げな子どもたちが心を開いて、喜びや感謝を伝える様子を目の当たりにした。偏見や差別を超えた共生社会を実現させるためには、幼いころから障害者とたくさんふれあうことが大切だと思う。

（取材・徳留亜弥）

＝水曜日掲載＝

共生社会を考える ⑩

相模原殺傷事件から１年

音楽が心をつなぐ

舞台に立つ障害者の頑張る姿見て

障害者と健常者が同じステージに立つ「ハートｔｏハートチャリティーコンサート」の実行委員長

井上　清春さん(63)

ハートｔｏハートチャリティーコンサート実行委員長の井上清春さん

いのうえ・きよはる　1954（昭和29）年、延岡市北方町生まれ。延岡西高卒。福岡大在学中に「ヤマハポピュラーソングコンテストつま恋全国大会」でグランプリ受賞。会社員。宮崎市。

障害者と健常者が同じ舞台に立つ音楽イベント「ハートｔｏハートチャリティーコンサート」を、20年前から、県内で開いている。共演する障害者からはいつも、元気や癒やしをもらっている。相模原殺傷事件で、被害者19人から生きることなどいろんな可能性を一気に奪った植松聖被告を許すことはできない。

植松被告に対しては、どうしてそこまで残酷なことができるのかとショックも受けた。人間として、本当にあんなことができるのか。被害者と家族の気持ちを思うといたたまれない。

「障害者はいなくなったほうがいい」などと被告が極端な選民思想を持つきっかけはあったかもしれないが、人の命をえり分けていいはずがない。事件から1年たっても、植松被告が奥底に持っているものを推し量ることはできない。

障害者との出会いは、大学1年の1972（昭和47）年。先輩に誘われ、長崎県の病院で筋ジストロフィーの若者たちを前に開いたコンサートが初めて。音楽をすごく喜んでくれたのがうれしくて、卒業するまで休みのたびに通った。

▽才能ある障害者いる

在学中、プロへの登竜門とされる音楽コンテスト全国大会で優勝した。卒業後は宮崎市で働きながら、音楽活動も続けた。79（同54）年、障害者施設の入所者と職員によるバンドを紹介してもらい、豊かな音楽性に感動。音楽をやる仲間として、自分のステージに出演してもらった。

当時、障害者がライブやイベントに出演する機会は、健常者と分けられていることが多かった。障害者バンドとの出会いを機に、県内にもすごい音楽才能を持つ障害者がいると考え、「ハートｔｏハートチャリティーコンサート」を始めた。いろんな人の心をつなぎ、お互いを思いやるきっかけになってほしいとの思いを込めている。

当初は1人でやっていたが、コンサートを見に来た高校時代の同級生が毎回、手弁当で運営に関わってくれている。18回目の今年は、7月に延岡と宮崎市で開催。広汎性発達障害のピアニスト野田あすかさんや、自らの「井上ファミリーバンド」など延べ10団体が舞台に立った。当事者の声を届けようと、難病支援トークコーナーも設けている。

▽穏やかに生きる権利

入場料は千円で、小学生以下と障害者手帳を持っている人は無料。チケットは毎回手売りし、出演者はノーギャラで出演してもらう。PRや会場費などを差し引いた額を、身近な福祉活動グループへ贈っている。今年はパーキンソン病友の会県支部など2カ所に、計11万5千円を寄付した。

出演してくれる障害者のもとを本番までに何度も訪れ、リハーサルを重ねる。うまく歌えなくても、手でリズムを取ったり肩を揺らしたり。いろんな表現があっていい。舞台に立つ障害者の生き生きとした表情からいつも、パワーをもらっている。頑張る姿を多くの人に見てほしいと思う。

障害のあるなしにかかわらず、人は人生を楽しみ、穏やかに、平和に生きる権利を持っている。いろんな考えや立場の人がいることを認め合うことが大切だ。

（取材・徳留亜弥、撮影・米丸悟）

＝おわり＝

宮崎市で30日 フォーラム

相模原市の知的障害者施設・津久井やまゆり園で起きた殺傷事件から１年が過ぎたのを機に30日、県内の障害者や支援者らがフォーラム「私たちが生きる意味」を宮崎市民プラザで開く。

同市のＮＰＯ法人・障害者自立応援センターＹＡＨ！ＤＯ（やっど）みやざき主催。午前10時に開場し犠牲者の慰霊台を設ける。同11時から音楽やダンスの舞台。午後０時半からは取材を続ける神奈川県・神奈川新聞記者の成田洋樹さんや東京都・国際医療福祉大大学院の大熊由紀子教授が経過などを報告する。同２時から当事者や歌人の大口玲子さん＝宮崎市＝ら５人によるパネルディスカッション。

入場無料で、手話通訳や要約筆記がある。問い合わせはＹＡＨ！ＤＯみやざき☎0985(31)4800。